

「対照言語学研究会」の歩み 神奈川大学における言語科学研究

武内道子

本大学には、英語、中国語、スペイン語をはじめ、母語である日本語はもとより、朝鮮語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、イタリア語と、多彩な言語を研究対象としている人が集まっている。ひとつの言語現象について、さまざまな言語での現われを話す場があったらいいという発想から、言語研究センターに研究会を立ち上げた。名づけて「対照言語学研究会」、11年目の活動に入っている。

それ以前、コーヒーカップ片手に、三々五々ことば談義に花を咲かせていた時期がある。研究へのアイデアやヒントはこういうカジュアルな場から生まれるもので、あのときの話まとめておけばよかったということも多かった。やがて、こういう論文を読んでみよう、このことについて少し調べてみよう、ではひとつまとめて話してもらおう、といった談話会的なものへとなっていった。

おりしも、1999年度に、「神奈川大学共同研究奨励」制度が始まった。この助成金を得て、産声を上げたばかりの研究会が、談話会から共同研究会へと脱皮するチャンスとなった。その後、2002年度に再度、副詞的表現の研究をトピックに、大きな助成金をいただき、集大成として、『副詞的表現をめぐって—対照研究』（ひつじ書房）を上刷したのである。昨2007年度に、「神奈川大学国際交流（学術研究）事業計画」の一環として、本研究会が「国際文化交流と言語科学」プロジェクトを推進、国際シンポジウムを開催した（みな

とみらいホールにて）。これを骨子に、センターの紀要30周年記念特別号と銘打って、『言語の個別性と普遍性』を出版した。センターの共同研究会は年々ひとつ二つと増えていき、一方で予算は不変という状況であるから、研究会として機能するには、こういった助成金制度は貴重で、ありがたいものである。2005年度から上記研究奨励制度が「神奈川大学共同研究助成」制度とリニューアルし、センターや研究所所属を離れ、学部を母体とすることになった。われわれの研究会は「モダリティ」現象をテーマに今年度から3ヵ年、助成金を交付されることになり、初年度の活動が始まっている。そして相変わらずセンターにその拠点を置かせてもらうことにした。

言語の普遍性は、言語獲得能力が遺伝的に決定されているという主張の論拠である。その生得性の証拠は、個人の属性としての言語に関する知識（言語知識）に求められる。われわれ言語科学者は、言語知識を、ちょうど呼吸をつかさどる肺や気管、あるいは消化をつかさどる胃や腸といった器官とパラレルに、心的器官としてとらえる。しかし、この器官は肺や胃と違って、脳を断ち割っても、レントゲンを撮ってもその存在を確認することができないから、仮説として提示するしかない。しかしながら、客体としての言語がある。言語事実を観察し、記述するという帰納的側面が、物理学などの純粋に演繹的な学問とは違うところである。そのありようを、なぜ今あるようにある

のかを説明する姿勢によって、その存在を確かめていく。説明を行うためには、何らかの理論の存在が不可欠である。

われわれは、多彩な言語からの検証と、それぞれの理論的基盤による多彩な切り口とから、人間

言語の華麗な豊かさが理解できるという信念を持ち、言語科学を人間の「こころ」の研究の中核をなすものと位置づけている。メンバーの枠は流動的でありながら、常にひたむきに取り組む姿勢を続けていきたいと願っている。

発見の喜び —— 歴史言語学の新天地 ——

彭 国 躍

最近、新しい歴史言語学を開拓しようと意気込んでいる。「大発見だ」と興奮することもしばしばある。大袈裟な独り善がりになりがちがない。しかし、その独り善がり仕事をしている実感を与えてくれている。

日本語の敬語研究は、体系的な取り組みとして明治時代から始まったとされている。その前にロドリゲス(1561-1634)の敬語記述はあったが、日本の国語学には受け継がれなかった。私は以前から、敬語研究が明治時代に突如に現れたというような捉え方に疑問を感じていた。松下大三郎、山田孝雄など明治の先駆者たちが「敬称、尊称、謙称、美称」などのような術語を使っていたことに、何か前史的なものがあつたのではないかと感じていたのである。

その疑問を抱きながら、数年前から江戸時代の文献に当たってみた。荻生徂徠(1666-1728)の『訓譯啓蒙』に「忝、辱」を「彼ヲアガメ尊デ、己ヲ謙ズル辭ナリ」、岡白駒(1692-1767)の『助辭譯通』に「請、幸」を「敬ノ辭、謙ノ辭」、釋大典(1719-1801)の『詩歌推敲』に「竊」を「謙辭」と解釈しているなどの事実が見つかった。日本語敬語研究史ではすっぱり抜けていた江戸漢学における敬語問題への取り組みが垣間見えた。

徂徠の朱子学批評からもしやと思い、朱熹(1130-1200)の著書の調査を行った。案の定、『論語集注』と『朱子語類』に「尊稱、謙稱、謙辭、美

稱」などが使われたことを発見した。宋代(960-1278)にあるなら、唐代(618-907)にもあるだろうと、孔穎達(574-648)、李善(?-689)などの注疏文献を調べてみたら、ことばの含意解釈として「謙辭、謙稱、美稱、通稱」などが使われたことを発見した。

研究には欲がつき物である。中国語に「順藤摸瓜」(蔓をたどって瓜を探す)という諺があるように、古い時代に遡ろうと、漢代(紀元前202-220)の訓語学者の注釈本を片っ端から読み漁った。高誘(205年在世)、何休(129-182)、鄭玄(127-200)、趙岐(110-201)、許慎(58-147)、孔安国(紀元前104年在世)などと。彼らの訓釈に「尊稱、謙稱、美稱、賤稱、尊敬辭、謙辭、應敬之辭、非敬辭、相親之辭、親愛之言」など敬語関連の術語がどしどし現れた。二千年前の訓詁文献にBrown & Levinson(1983)のpositive politenessとnegative politenessを含めた対人機能の解釈がなされたことに驚きを禁じえなかった。

ここまで来たら行ける所まで行こうと思い、春秋戦国時代(紀元前770-前221)の文献『十三經』を通読した。もっとも古いものとして『春秋穀梁傳』に「尊稱、卑稱、美稱」、『春秋公羊傳』に「卑辭」という術語が使われたことを発見し興奮した。

日本の敬語研究史への興味がきっかけでこの調査を始めたが、気がついたら、十年の歳月が流れ

た。歴史社会言語学、歴史語用論の新しい地平が見えたような気がしてひとりで喜んだ。膨大なデータの収集と整理に明け暮れている自分を支えているのは、まさにその時々の発見の喜びである。

参考文献：

Brown & Levinson 1987 *Politeness: Some universals in language usage* Cambridge University Press.

彭国躍 2007 「漢代鄭玄が訓釈した古代中国語の対人関係機能について—歴史語用論のアプローチ」『語用論研究』(9) 日本語用論学会

洗練された第二言語コミュニケーションの探求 —「中間言語語用論」研究への誘い

水野晴光

はじめに：

人間のコミュニケーション場面における言語使用の際の意味現象を研究の対象とする学問が、語用論 (pragmatics) である。語用論といっても、その研究アプローチは以下のように多岐にわたっている。

- (1) 発話の遂行機能、適切性条件、間接的発話行為、会話の含意、等の解明に力点を置く研究。
- (2) 談話・テキストの展開メカニズムに特徴的な情報の流れ、結束性・一貫性、などを解明する研究。
- (3) 対人関係 (または社会関係) の機能からみたポライトネスの解明を主眼とする研究。
- (4) 一次資料としての言語データの記述と分析に基づく対話構造、会話構造の解明などを主眼とする研究。
- (5) 民族学的な観点から見た対話分析・会話分析の研究。
- (6) 談話・テキストの背後に存在する言語主体の語りの構造とナラトロジー (物語論) の研究。
- (7) 二言語または複数言語の伝達手段による話し手・聞き手のコード変換のメカニズムに関する研究。
- (8) 異なる分化・社会的な背景をもつ伝達者による異文化間コミュニケーションの諸相に関する

る研究。

- (9) 形式と意味の関係からなる記号系の使用と解釈の効果の解明を主眼とする修司的研究。
- (10) 談話理解、対話理解を可能にする話し手、聞き手の知識構造、情報構造のモデル化に関する研究。

他方、言語研究の暗黙の了解事項として、「単一コード・モデル」と「閉鎖体系モデル」がある。前者は、言語が本質的にコミュニケーションを目的とするかぎり、そのコードは当然、言語集団ごとに単一でなければならないという公準であるが、現実の私達の言語生活は、同じ個人であっても、職場で話すことば使い、友人との会話のことば使い、家庭でのことば使いなど、実際には多数のコードの複合の上に成り立っており、日常のこととしてたえずコードの探知と変換を行なっている。後者は、言語コードの体系そのものが、さまざまな場面での言語使用を前提にして合理的にでき上がっているというものである。近代言語学は、どの学派も、言語のもつこのような体系性を前提に、言語行動の全体性を等閑視してきた。しかし、音声や文法や意味上の統一的説明を与え得るものは、言語行動の心的パターンの共通性以外にはない。とりわけ、言語研究における「単一コードモデル」と「閉鎖体系モデル」は、言語コミュニケーション

ンにおける意味研究の発展を阻害してきたことは否めない。

さらに、ソシユールはラング（音声、文字などのコード）とパロール（言語活動）の区別を確立し、ラングの研究を優先すべきことを主張した。その結果、今日、ラングの研究は発展したが、パロールの研究は立ち遅れており、とりわけ、言語運用の過程全体を把握する一般理論の構築が急務となっている。

●中間言語研究の沿革

第二言語習得の分野におけるこれまでの研究の多くは、第一言語との比較や、形態素の習得順位、及び習得の道筋や第二言語の普遍性に関する抽象的なレベルの研究により多くの比重が置かれ、教育実践面の研究は極めて少なかった。

四半世紀以前からこの分野では、言語習得におけるエラーの重要性が認識され、多くの研究が行なわれてきた。まず、言語対照分析は、学習者の困難点を説明することに貢献したが、エラーを言語学習の負の要素とみなし、外国語学習における母語の干渉を強調し過ぎた。やがて、その理論的基盤であった行動心理学に対して、1960年代後半にノーム・チョムスキーが異議を唱え、エラーの原因がL1の干渉以外にも存在することが明らかになると、研究の主流は次第に誤答分析に移って行った。しかし、言語対照分析に取って替った誤答分析にも、その後多くの問題を孕んでいることが指摘されるに至った。

すなわち、言語対照分析が、学習者のエラーを排除すべきものとしてネガティブに捉えたのに対し、誤答分析は、エラーを言語習得に必然的なものとして高く評価したが、①両者は、エラーの一断面に過ぎない静的なプロダクトのみを分析の対象としていた。その結果、②学習者の心理過程で連続的に発達し、状況によってさまざまに変化する可能性をもつエラーの実態を正しく把握できなかった。また、③その研究も研究者の一方的な視点で行なわれ、④学習者がその場の状況を考慮して、あらかじめエラーとなる表現を避ける回避現象なども分析の対象から外されてしまった。しか

も、⑤データ収集の点で科学的な厳密性に欠けるものが多かった。さらに、⑥目標言語の困難点の原因も明らかにされなかった。

●中間言語分析の方法

第二言語習得の分野では、これまで定期観察による縦断的研究の成果がかなり集積されてきてはいたが、それらのデータの多くは主観的要素があまりにも濃厚なため、その結果を一般化できなかった。また、そのデータの採集には時間がかかり過ぎる上に、被験者達のプライバシーを考慮すると、教室のような場面で、成人集団を対象にしたデータ採集は極めて困難であった。そこで、水野（Mizuno, 1985）は、言語対照分析と誤答分析の長所を取り入れ、かつ両者の短所を補完するとともに、データ収集の点でよりメリットの多い横断的研究がもつ短所を統計学的に補強し、その多くの長所を活用して、第二言語習得研究の病理学的アプローチとして中間言語分析法を提唱したのである。

この分析法では、①学習者のエラーは、学習者の背景に拘らず、基本的には類似しており、学習者の言語は同じ中間言語のプロセスを辿るというS. P. コーダー（1967）の主張を前提に、②目標言語の初期から末期に至る全習熟度レベルの被験者を含むサンプルを少なくとも上、中、下の3レベル（各レベルのN \geq 500）に等分し、判断テストと産出テストのデータを統計処理する。したがって、横断的に入手したこのような大サンプルのデータは、一個人の言語発達上のプロセスを表すものと見なし得る。その結果、③このデータから中間言語の発達プロセス上の潜在的なエラーの動態（出沒）を客観的に把握して、病理学的にそのエラーの成立と経過の実態を比較的短期間に把握することが可能になる。また、とりわけ化石化のように、④中間言語の発達プロセス内に執拗に残るエラーの原因の解明も可能になる。しかも、このアプローチは研究者と学習者の双方向の視点を重視するため、客観的なエラーの診断が可能になる。さらに、⑤隣接諸科学の知見を援用してマルチレベルの仮説検証を行なえば、これまで化石化と見なされていた項目に光を当てるとともに、⑥指導

上の具体的な指針を引き出し、⑦普遍妥当な第二言語習得理論を打ち立てる事を可能にする。

●中間言語分析の意義と将来の展望

筆者はこのアプローチのモデルケースとして、英語冠詞に関する中間言語分析を行なった (Mizuno, 1986~1999)。その結果、日本人英語学習者は、上級レベルになっても英語冠詞の使用に自信がもてないという実態が判明した。しかも、その原因が意味・語用論的知識の欠如に起因することも明らかになった。この知見は英語冠詞の指導のみならず、英語教育の指導一般に対する貴重な示唆である。それゆえ、中間言語分析の成果は、第二言語教育の指導上の歪みを是正する。一方で、今後隣接する諸科学の知見を援用して、中間言語

分析を推進すれば、第二言語に関する指導上の有益な知見が豊富になり、その結果、それらの知見が外国語教育の向上に著しい貢献をすることは間違いない。

さらに、今後益々増加すると考えられる中間言語分析による語用論研究が、第二言語学習者の中間言語発達の解明と合わせて、第二言語コミュニケーションの過程全体を心的過程として統一的に解釈することができれば、言語理論の研究に対する貢献も、応用的諸分野への貢献もはかり知れないほど大きい。

最後に、今年度からスタートする私達の中間言語語用論共同研究プロジェクトに、より多くの有志が参加されることを期待する。

平成20年度全国大学

IT活用教育方法研究発表会を聴講して

小林 潔

2008年7月5日(土)に私学会館(アルカディア市ヶ谷)で開催された標記の研究発表会に参加・聴講する機会を得た。本研究発表会は社団法人私立大学情報教育協会(私情協)が1993年から主催しているもので、本学も私情協の正会員である。今回の研究発表会の参加者は、122大学、12短大、5賛助会社で計227名であった。参加費は9500円、筆者は科研費から支弁をうけた〔基盤研究(C)20520530「非専攻課程のための新しいロシア語習得基準とその教育内容に関する総合的研究」(研究代表者外国語学部堤正典/研究分担者小林潔)2008年度~2010年度(日本学術振興会)]。堤教授と筆者は言語研究センターの08年度共同研究としても「ロシア語習得基準の研究 新しいロシア語習得基準策定のための諸問題の検討」を進めており、今回の聴講もその活動の一環をなす。

当日の諸報告は、語学系、医師薬系、理学系、情報専門系の4分野に分かれて行われ、筆者は語

学系の以下の6報告および合同特別セミナー「教育効果を高めるための授業方法」を聴講した。

川島浩平(武蔵大学)「地域研究講義における語学学習と概説授業の統合」(英語動画ニュースを用いた地域研究と英語学習とのリンクの試み);

木内徹・福島昇(日本大学)「学生のやる気と集中力を高める英語教育のIT化」(学生の集中力を考慮し3部構成授業、スクリーンへの教材投影とマークシートを用いた問題演習を実施);

鈴木靖(法政大学)「授業同期型eラーニングによる自宅学習について」(教員に特別なIT技術を要求せず、宿題提出期限の曜日と時刻、宿題範囲の設定のみ求めるシステム);

水野邦太郎(慶應義塾大学)「Interactive Writing Communityにおける学びの共同体創りとライティング能力の育成」(学習用ウェブサイト構築で、ライティング教育の4問題一題材、目的、対象、ニーズを解決する);

松浦宏之（太成学院大学）「英語学習のためのITリテラシー活用法」（学生にネット上のリソースを利用させることで英語運用能力と情報処理能力を育む）；

金義鎮（東北学院大学）「韓国語初心者のため
の手書き指導および自習ソフトウェアの活用」
（動画カメラで学生の筆記をソフトに取り込み、
ハングル（文字）指導を効率化）。

何れも興味深く有益な報告であったが、習得基
準策定および日々のロシア語教育の観点からは特

に鈴木報告と金報告が参考になる。eラーニング
を効果的にするためには1回1課でこなせる教科書
が必要で、それは何らかの習得基準に基づいた共
通教材であるべきであろう。またロシア語は所謂
なじみのないロシア文字を用いており、その文字
習得も習得基準に入る。金報告にあるような文字
自習ソフトはロシア語学習にもあって良い。

習得基準を画餅に終わらせない実践と到達度チェッ
クのためにIT活用が効果的だということを教え
てくれた研究発表会であった。

言語研究センター共同研究

2008年度言語研究センター 英語入学試験問題リサーチグループ報告

デビッド アリン

本リサーチグループは、今年度、英語入試問題
のあらゆる側面の分析において成果をおさめるこ
とができた。試験問題分析に用いられるいくつか
のアプローチについて、それらが学習者の目標言
語の習熟度と習得をより良く測定することにどの

ように繋がるかを議論した。Rasch分析のための
最新のソフトウェアを入手し、また、日本国内・
国外における言語テスト研究の成果を収集するこ
とが出来た。

言語研究センター共同研究

HSK聴解問題を題材とする 中国語自動学習システムの構築

加藤 宏 紀

多くの外国語同様、日本人が中国語を学ぶとき
の最大の課題は聴き取り能力がなかなか向上しな
いことである。こうした課題を克服するための一
手段として、本研究グループはHSK（漢語水平考
試）の聴解問題を題材とした自動学習システムを
構築している。HSKの問題を題材としたのは、試

験対策という実用面だけでなく、音声、語彙、文
法知識などがきわめて標準的であり、かつ出題の
ポイントが比較的まとまっているため、学習者の
聴き取り能力を向上させるのに非常に適している
からである。

現段階では、試験的にいくつかの聴解問題を作

成し、その音声および選択肢を電子データ化し、それをもとにパソコン上の操作で「出題→解答→正解確認」のプロセスを行うためのプログラムを作成した。

今後は問題数を増やすと同時に、正解を導くた

めに必要な音声、語彙、文法、その他関連する知識や聴き取りのポイントを含めた解説文を作成し、利用者が自律的に学び、聴き取り能力を向上させるためのシステムの充実を図っていく。

言語研究センター共同研究

朝鮮語初級用リスニング練習教材の開発

尹 亨仁・永原 歩

近年、語学教育の目的はコミュニケーション能力を身につけさせることに重点が置かれる傾向が強い。本学における朝鮮語教育でも、実際に使える朝鮮語を目指して日々の指導に取り組んでいる。しかし、リスニングの訓練は授業内だけでは十分とは言えず、学生が自宅で授業の予習・復習に使用するテキストに沿った発音・リスニングの練習課題用教材が必要である。

本研究では、単なる音声CDではなく、学習者の困難な点に着目した教材作成のため、学習者が文字を見ただけでは発音しにくい単語やフレーズ、聞き取りが困難な単語やフレーズを授業テキストやハングル能力検定試験の過去問題から収集・分析を試みている。

今年度は、「朝鮮語初級B I・II」の教材として本学の教員が作成した会話用テキスト『文型で覚えるワン・フレーズ・コリアン』の内容に沿ったCD教材を、録音ができる専門機関及びNHKのフリーアナウンサーでもある本学の非常勤講師の協力を得て約100枚作成した。学生に配った結果、反応は上々である。初習言語である朝鮮語の日常会話に基づいた発音とフレーズに慣れることで、最近接することの多い韓国ドラマや映画を理解する上でも役立つはずである。

次年度は、年々受験生が増えているハングル能力検定試験の4、5級に出題される発音問題やリスニング問題を分析し、その語彙リストのCDを作成する予定である。

言語研究センター共同研究

ロシア語習得基準の研究 新しいロシア語習得基準策定のための諸問題の検討

堤 正典・小林 潔

大学における非専攻課程の外国語教育は、専攻課程に比べて非常に少ない時間数で行なわなければならない。しかし、当然一步一步ステップアップ

することはおろそかにできず、そのなかで、できる限りの実用性を盛り込むことが理想である。すでに、ロシア本国や日本におけるロシア語検

定試験では、各級の合格基準が（ある程度）公表され、事実上の習得基準となっているが、いまだ広く普及しているわけではない。

これらの既存の習得基準を検討し、また、既存のロシア語教材を検討するなかで、非専攻課程に（さらにはセメスター制にも）対応するロシア語習得基準を確立することを目指している。このことは、非常に必要性が高いと考えている。日本人に対するロシア語教育を念頭においており、日本におけるロシア語教育の実践での経験、日本語とロシア語との対照研究などの成果もふまえて検討する必要がある。

まず、既存のロシア語教材（日本・ロシアで2001年以降発行のものを中心とし、そのうちでも非専攻課程で用いるのに適したもの）における語彙・

文法・表現等を検討している。現在は、主として神奈川大学横浜キャンパスでの外国語科目ロシア語初級を念頭において検討を行なっている。また、ロシア連邦におけるロシア語検定（ТРКИ）やその基盤となっているEUのCEFRなど、既存の習得基準について非専攻課程での適用を検討している。

このふたつの検討結果を結合しつつ、非専攻課程に対応する新しい習得基準の完成をめざす。上にも書いたとおり、ロシア語教育の実践的经验や、対照言語学的研究の成果も取り入れて検討していく。

ロシア語を用いるための背景となる知識（レアリア）についても、どのような知識が必要となるかを習得基準に連動させて検討している。

言語研究センター共同研究

学術場面における日本語の話し言葉の分析 —大学学部生対象上級日本語シラバスの構築に向けて—

富谷 玲子・高木南欧子

大学の学術場面における日本語の話し言葉に関する関心は最近高まりつつあるが、いまだ十分に解明されているとはいえない。本研究では、前年度に引き続き、少人数のグループ内での相互作用を伴う協同学習場面における日本語の話し言葉の特徴と、スピーチにおける日本語の話し言葉の特徴について、日本語母語話者の大学生と学部留学生の話し言葉データを構築し分析を行った。語彙と文型の点では日本語母語話者と留学生の間に大きな違いがなく、フィラー、リペア、ポーズなどパラ言語面において違いが見られ、それが話し言葉の「分かりやすさ」を決定付ける要因の一部となっていることが明らかになった。2008年度には、この結果を応用し、学術場面における日本語の話し

言葉の教育を、留学生と日本語母語話者の学生を対象として行った。「分かりやすさ」の要因を明示的に提示することによって、学部留学生も日本語母語話者の学生もその特徴を理解することができた。運用面では、日本語母語話者では短期間のうちに改善が見られたのに対し、学部留学生の場合は顕著な改善は見られず、「分かりやすさ」の要因を習得するためには何らかの手当てが必要であることが明らかになった。その具体的方策は今後の課題とする。

